

第8場

二〇〇八年

シルヴィアのアパート。彼女がドアを開けたところ。そこにオリヴァーがいる。口から血が出ている。

1 シルヴィア
ぎげんなよ。

2 オリヴァー
もうそういうあいさつやめてくれる？ いい加減感じわりーよ。

3 シルヴィア
ったく。

4 オリヴァー
そっちのほうがいい。

5 シルヴィア
血が出る。

6 オリヴァー
相変わらず、驚異的な観察力。

7 シルヴィア
あんた何やってんの？

8 オリヴァー
近所にいて。

9 シルヴィア
何があったの？

10 オリヴァー
事故。

11 シルヴィア
事故？

12 オリヴァー
細かい話はあとにしてくれる、お宅が血の海になっちゃうよ？

13 シルヴィア
何したの？

14 オリヴァー
切り傷だよ、たかが。キッチンペーパーで十分です、ミス・ナイチンゲール。

15 シルヴィア
座って。

オリヴァーは座る。シルヴィアはペーパーを取りにキッチンへ駆け込む。

16 オリヴァー
僕のフェアウェル・ツアーだよ。言ってみりゃ差し入れ。大勢いるファンの一人から。でもダークな趣味の持ち主でさ。あんたって予言の天才だね、ミス・ノストラダムス。何かに投票してるやつか知らないけど、なんちゃってリベラルですらない。原始人、そう呼ぶのが正しい。ピンストラップのスーツ着て髭も剃ってるけど、絶対そう。あんなぴかぴかのレースアップ・シューズ見たことないよ。いまだき見た目じゃわかんねーわ。ほら穴から這い出したばかりには見えない。汗のにおいはぎりぎり感知したけど、まろやかなアクア・ディ・ジオの香りに紛れて。

シルヴィアがキッチンペーパーを手に駆け戻る。オリヴァーが鼻をぬぐうよう、すこし渡す。

17 シルヴィア
たしか言ってたよね、このままじゃ人生もたなくなるって。

18 オリヴァー
ちよっと見にいっただけ。

19 シルヴィア
きのうのきょうだよ。

20 オリヴァー
そんな最近？

21 シルヴィア
一週間は我慢すると思ってた。

22 オリヴァー
あんたの説得も街のデカマラの誘惑には勝てなかったんだね。

23 シルヴィア
ったく何があったの？

24 オリヴァー
僕スーツの男に目がなくて。

25 シルヴィア
明らかね。

26 オリヴァー
兆候はあったの。やり始めたら言葉責めがいつもより若干リアルで。

27 シルヴィア
どんな言葉責め？

形容詞の使い方がすごいんだよ。名詞の使い方もぶっ飛んで、絶句しちゃった。もちろんそれだけじゃないけどね、なかなか言葉返せなかった理由は。

29 シルヴィア
30 オリヴァー
さようございますか。
で、絶頂を迎えたたん、そいつ、僕のことを押してきて。何てゆーか——邪魔だ、急用があるんだみたいな、友達が待っていると、女房連れてディナーとか、スーパーが閉まるとか。そんなようなこと。ぐっと押されただけ。

31 シルヴィア
血が出てんだよ。

32 オリヴァー
ロレックスだね。なんかじゃらじゃらしたもの。上くちびるに残念な角度で入っちゃった。でも押されただけ。パンチじゃない。

33 シルヴィア
34 オリヴァー
なら、いいけどさ。
ゆえに「事故」って言葉を使いました。何が何だかわからないうちに向こうは仕事に戻った。

35 シルヴィア
36 オリヴァー
もし気づいてれば、愛車のジャガーでうちまで送ってくれたらうね。
間違いない。

間。

37 シルヴィア
38 オリヴァー
ざけんなよ、オリヴァー。

リサーチだよ。

39 シルヴィア
「リサーチ」？

不特定多数とのセックスについての記事。なぜか僕に白羽の矢が。

間。

41 オリヴァー
42 シルヴィア
ゲイの同胞の大群に囲まれるっていえばさ、明日の件だけど。
プライド？

うん。僕、行かない。イタリア人に謝っというて。

43 シルヴィア
44 シルヴィア
来るでしょ。

行かないマジで。一日ベッドで過ごすつもり、傷を癒さないで。

45 オリヴァー
46 シルヴィア
フィリップも誘ったよ。

うそつき。

47 オリヴァー
48 シルヴィア
彼、寄ろうかかって。わたしのためって言ってたけど。あんたも来るって伝えたよ。かまわないって、お互い大人だし、何とかなる。そんなようなこと。

それ本気で言ってる？

49 オリヴァー
50 シルヴィア
なんでわたしがうそをつく？

容赦なく目的を遂行するタイプだから。

51 オリヴァー
52 シルヴィア
フィリップは来る。よかったら来な。それかベッドに引きこもって考えてれば、孤独と死について。

それはどうも。

知らせてよ。お弁当の支度があるから。

53 オリヴァー
54 シルヴィア
だいたい時代錯誤だよ。ピチピチのTシャツとか羽根飾り背負ったドラァグクイーンとか。何でもいいけど、あれって意味あんの？ 教えてよ。あれってデモンストレーション、セレブレーション、それともファッションショー？

あまのじゃく。

55 オリヴァー
56 シルヴィア
57 オリヴァー
一万人的おネエが腕の太さ褒め合ったり。マジでだっせーわ。

間。

58 オリヴァー
ところできれいじゃん。

59 シルヴィア ありがとう。
 60 オリヴァー みんなでパーティー？
 61 シルヴィア 一人。単数。そのとおり。
 62 オリヴァー あっそ。
 63 シルヴィア デイナーに来るの。
 64 オリヴァー お料理中？
 65 シルヴィア そう。
 66 オリヴァー いいにおい。
 67 シルヴィア ありがとう。
 68 オリヴァー まさかイタリアンじゃないよね。マンマの料理と比べるよ。あいつらみんなそう。
 69 シルヴィア そうなの？
 70 オリヴァー イギリスのモンにしときな。冷凍のグリーンピースとかそういうの。
 71 シルヴィア そろそろ来るんだけど。
 72 オリヴァー 興奮するー。

間。

73 オリヴァー で、他に何か言ってた？
 74 シルヴィア フィリップ？
 75 オリヴァー ううん、エルトン・ジョン。うん、フィリップ。
 76 シルヴィア 本の話をした。
 77 オリヴァー 本？
 78 シルヴィア いま読んでる本のこと言ってた。何かハンガリーの。
 79 オリヴァー でも僕のことは何も言ってなかった。
 80 シルヴィア 何にも。さっき言ったことだけ。会うのはかまわないって。

間。

81 オリヴァー ざけんなよ。僕のスイッチの入れ方わかってる。
 82 シルヴィア 当然でしょ。
 83 オリヴァー 僕が行くってわかってる。
 84 シルヴィア 当然でしょ。
 85 オリヴァー また会いたい。いっしょにいたい。
 86 シルヴィア フィリップは特別だよ。ふところが深くて、正直で、いちずで。
 87 オリヴァー 心底思いやりがあつて。
 88 シルヴィア おまけにハンサム。

間。

89 オリヴァー たまに……
 90 シルヴィア 何？
 91 オリヴァー こういうのって、ない？
 92 シルヴィア どういうの？
 93 オリヴァー ちょうど眠りに落ちるとき、夢が始まる直前。それかたぶん目覚めた直後、目はひらいてるけど、意識はまだ夢のなかにいるとき。
 94 シルヴィア 何？
 95 オリヴァー 人生のはかなさに愕然とすること。はかなき。気まぐれ。まるで花火。

96 シルヴィア
97 オリヴァー

それはある。
そういうとき感じるんだよね、たった一つ大事なことは意味を見つけることだって、理由をね、はかなさにビンタ食らわす何かを。自分はこのにいたって言うために。存在したんだ。いたんだって。たぶんその方法は二つしかない——仕事、それから人との関わり。どれだけ人を変えたか。どれだけ変えてもらったか。どれだけ踏ん張ったか。お互いに。せめて精いっぱいやってみたか。それで花火の美しさは決まる。
アーメン。

98 シルヴィア

間。

99 シルヴィア
100 オリヴァー
101 シルヴィア
102 オリヴァー
103 シルヴィア
104 オリヴァー
105 シルヴィア
106 オリヴァー
107 シルヴィア
108 オリヴァー
109 シルヴィア
110 オリヴァー
111 シルヴィア

どうすんの？
どうすんのって？
できることは一つしかない。
つまり？
やめるんだよ、そういうやつをくわえるのは。
誰のブツ？
あんたを抑圧する男のブツ。
それは深いわー。
ナチスⅡロレックス系の男。
生涯学習講座みたい。「ふしだらな同性愛者のためのマルクス理論」。
でも近い将来ファシストのブツを口から出して、そいつを見上げて言うの、たとえば——
「ねえ聞いて——」

112 オリヴァー
113 シルヴィア

「ねえ聞いて、ゴエ立派なイチモツにはたまげたけれど、決めました、何十億年前、魚の先祖が暗黒の海底から這い出たときのような、ちょっとした気分、これからはあたくしくわえるイチモツは選びます——
ソーシャルワーカーかヨガのインストラクターにします——
正義、平等、互いに尊敬し合う精神、そういうものを持ち合わせた人、せめてそう思える人になります。そういう進化の飛躍が必要なんです、そうしなければ神様はあたくしにどのような末路を用意することでしょう？」
ドブのなか。檻のなか。実存的恐怖のボンデージマスクで窒息死。

114 オリヴァー

間。

115 シルヴィア
116 オリヴァー
117 シルヴィア
118 オリヴァー
119 シルヴィア
120 オリヴァー

解決してよかった。じゃわたしそろそろ……
そろそろ何……
マリオが来るころだから支度とかね。いろいろと。
帰ってこと？
いや、まあ、一杯だけ飲んでマリオに会ってくのはかまわない、けど……
けど何？

間。

121 シルヴィア
122 オリヴァー
123 シルヴィア
124 オリヴァー

つまりはこういうこと。いてあげるのが楽しくないってことじゃない。たまにはね。実際にあげてるし。
たまには？
わたし余裕が必要な、オリヴァー。しかも今晚だけのことじゃなくて。
余裕？ どういう意味、余裕が必要って？

疑問が宙づりになる。

じゃ、とっとと消えますよ。

あんたがここにいるとね、何となく支配されちゃうから。

「支配」？

魅力ってゆーか、あんたのカリスマ、あんたの存在感。

それってひとさじのお砂糖のつもり？

だから今夜はそんなふうここにいてほしくないの。わたしほんとに、ほんとに好きな人と出会えたから――

追い出しかよ。

だから圧倒的に思うわけ、これからはちょっと、あんたのことより彼のことに集中しようって。

追い出しですか。

悪いことじゃないと思うし。

僕たち終わったね。

お互いにとって。

間。

はい。言っちゃった。

ブザーが鳴る。

ヤベ。

明るい未来だ。

もう来ちゃった。

じゃ、消えますよ。

いて。一杯だけ。そしたら帰って。

ぜんぜん歓迎されてないもん、新郎新婦にプレゼントされたコンドームみたい。

シルヴィアはドアへ急ぐ。そして立ち止まる。

でも明日は来て。公園に。たぶん……

たぶん何？

たぶん大事だと思うから。それにそう、全部引くるめたものだから。デモンストレーション。セレブレーション。ファッション・ショー。でもいま言った順番で。

陪審員は審議中。ほら、さっさと開けてやんな。

シルヴィアは部屋を駆け出る。オリヴァーはその場に残り、一人きり。考え込み、何かを思い出そうとしているようである。目を閉じ、そしてささやくように――

フィリップ。